

主日礼拝説教「人生の終わりに問われること」予稿

日本基督教団石神井教会 2020年7月19日

【使徒書日課】使徒言行録 24章10～21節

¹⁰総督が、発言するように合図したので、パウロは答弁した。「私は、閣下が多年この国民の裁判をつかさどる方であることを、存じ上げておりますので、私自身のことを喜んで弁明いたします。¹¹確かめていただければ分かることですが、私が礼拝のためエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっていません。¹²神殿でも会堂でも町の中でも、この私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを、だれも見ただけではありません。¹³そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げるできません。¹⁴しかしここで、はっきり申し上げます。私は、彼らが『分派』と呼んでいるこの道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に則したことと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。¹⁵更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。¹⁶こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています。¹⁷さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。¹⁸私が清めの式にあずかってから、神殿で供え物を献げているところを、人に見られたのですが、別に群衆もいませんし、騒動もありませんでした。¹⁹ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに出頭して告発すべきだったのです。²⁰さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。²¹彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 5章19～36節

¹⁹そこで、イエスは彼らに言われた。「はっきり言っておく。子は、父のなされることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなされることはなんでも、子もそのとおりにする。²⁰父は子を愛して、御自分のなされることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。²¹すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。²²また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。²³すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。²⁴はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。²⁵はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。²⁶父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようになさったからである。²⁷また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。²⁸驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、²⁹善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。」

30わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」

31「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。32わたしについて証しをなされる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなされる証しは真実であることを、わたしは知っている。33あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。34わたしは、人間による証しは受けない。しかし、あなたたちが救われるために、これらのことを言うておく。35ヨハネは、燃えて輝くともし火であった。あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しもうとした。36しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている。」

【こども説教】主イエスの道に従う

三か月も「集まり」を休んでいた教会ですが、7月になってから「集まり」を再開し、すでに三回目の日曜日を迎えました。以前とは違う形で礼拝に集まるようになりましたが、少しずつ慣れてきたのではないのでしょうか。

集まり方が変わったと言っても、教会が大切にしてきたことは、以前と何も変わりません。教会は、「集まる」こと自体を大切にしてきたのです。それは、何よりも主イエスが大切にされていたことだからです。

主イエスは、ご自分一人で何でもお出来になる方でしたが、弟子を集めて、いつもご自分と一緒にいるようにされました。「弟子を集めた」と言っても、優秀な人材を選んで集めたわけではないようです。主イエスが集められたのは、弟子たちだけではありません。誰彼構わず、どんな人のことも、お集めになられたのです。山の上で五千人を集められたときもありました。でも、そういう大規模な集まりよりも、主イエスが大切にされたのは、皆が一緒に食卓を囲む食事の席にいろいろな人を集められることでした。ご自分が催される食事会でなくても、誰かの家で開かれる食事会に招かれたときにも、周りの人がびっくりするような意外な人を集めて来て、一緒に参加されたのです。そこには、周りの人が心配したり、嫌な顔をするような人も集めて来られましたが、主イエスは、いつもそのようにされたのです。

主イエスがそのようにされたのは、それが「御父」とお呼びになられた神の御心だと知っていたからです。この世界の中には、人と人とを引き離そうとする力が強く働いています。「距離を置く」ことが「安全」と言われるのは、そうすればお互いに害することがないからです。でも、人は一人で生きられません。「距離を置く」ことには限界があります。お互いを「受け入れ合う」ことが必要です。主イエスは、そのことを教えてくださるために、弟子たちをお集めになられました。今も、主イエスに従う教会は、共に集められては、そのことを主イエスから学んでいるのです。

正しい者も、正しくない者も

「集まり」を再開する中でまだ再開していない「老いを考える会」は、三年前に「エンディングと葬儀を学ぶ会」として始めた集会ですが、再開するにあたり、名称と学びの内容を再考しています。わたしは、キリスト者としての死生観を学ぶ会として進めていきたいと考えていますが、これまで参加されてきた皆さんは、必ずしもそのような関心ばかりではないようです。

死生観、あるいは「命」の問題は、ときに人の間で混乱と衝突を生じさせます。発言をしたり、議論を交わしたりすることは、避けた方が賢明だとお考えの方も、少なくないのかもしれませんが。けれども、皆さんの中に、あまりに『聖書』の教える死生観と異なる考えを持たれている方がいると、牧師としては少し心配になることもあるのです。

「死んだら天国に行く」と、日本人の多くが当たり前のように言います。無宗教を通して来られた方でも、家族の葬りに際して、そのような言葉で送ることは少なくありません。いつの日か「天国で愛する人と再会するとき」を希望とすることを慰めとして、今生の別れをするのでしょうか。教会の葬儀で歌う讃美歌にも、そのように歌われるものが少なくありません。

ところで、その「天国」には、誰がいるのでしょうか。愛する人、会いたい人だけでしょうか。愛せなかった人、会いたくないと思っていた人は、そこにはいないのでしょうか。

使徒書日課（使徒 24 章）でパウロは、「**正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています**」と語っています。福音書日課（ヨハネ 5 章）で主イエスも、「**時が来ると、墓の中にいる者は皆、…善を行ったものは復活して命を受けのために、悪を行った者は復活して裁きを受けのために出て来る**」とされています。『聖書』では、人は皆、死んだ後、時が来ると復活させられる、と教えられているのです。「天国」が、死んだ後の復活によって入れられるところだとしたら、そこには、わたしたちの愛する人だけでなく、愛せなかった人もいるし、再会したい人だけでなく、二度と会いたくない人もいる、ということではないのでしょうか。

もちろん、パウロや主イエスが、このような「復活」について触れるのは、それによって神が「最後の審判」をしてくださるということを感じているからでしょう。人が人生の歩みの中で為したことが、たとえその死を迎えたときに正当に評価されないことがあったとしても、神が、すべての者を復活させられる「終わりの日」に、本当に小さな行為まで見落とされることなく全生涯を真っ当に評価してくださるのです。そのことを、主イエスは、「羊飼いが羊と山羊を分けるように」（マタイ 25:32）なされることだと言われたことがあります。

だからと言って、わたしたちは安心できないでしょう。自分と自分の愛する人、再会したい人は同じ側で、自分が愛せなかった人、再会したくない人は向こう側で、などと都合よく行くわけがないのですから。

神の子の声を聞くととき

実のところ、パウロが「正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を…抱いています」と言うとき、それは、「最後の審判」によって自分のしてきたことの正当性を認めてもらえるとか、自分と相容れない立場の者の不当性が糾弾される、というようなことを考えていたのではないようです。彼がコリントの教会に宛てて送った手紙の中で、今日の箇所と同じような趣旨で、「わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行なったことに応じて、報いを受けねばならない」（Ⅱコリ 5:10）と言っているところがあります。しかし、それに続いて彼が強調するのは、そのキリストは、人が神と和解させていただくために来られたのであり、それは人が互いに心を開いて和解するためなのだ、ということでした。「終わりの日」の「最後の審判」の裁きの座に、キリストが神と共にあられて、裁きの後の和解を実現してくださると、パウロは考えていたのでしょうか。

主イエスも、神の裁きにご自身が関わられることを、今日の福音書日課でお語りになられていました。しかも、パウロよりも踏み込んだ言い方をされています。「父は…裁きを行う権能を子にお与えになった」というのです。キリストが御子として、「最後の審判」の裁きの座で、弁護士のようにとりなしてくださるというのではなく、裁判官として裁きの権能を行使される、というのです。ただ、それは、「父から聞くままに裁く」ものだ、と。

この主イエスの御言葉は、ここで完結していないようです。主イエスは、この後の機会に幾度も、「わたしはだれをも裁かない」（8:15）とおっしゃられているからです。いったい、主イエスは、裁かれるのでしょうか、裁かれないのでしょうか。いいえ、そこに関心が向かってしまうのは、わたしたちが、自分がどのように「裁かれるか」ということばかりに関心があるからかもしれません。むしろ、主イエスの御心は、「裁き」とは違うところにあるのではないのでしょうか。

主イエスは言われるのです、「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる」と。だからこそ、「時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞く」のです。

パウロが「終わりの日」の「最後の審判」の中に見ていた神と人との和解、人と人との和解を、主イエスは、今すでに、ご自身の前で始まっていることとしてご覧になられているのです。

皆さんは、教会に来て、主イエスの御言葉をお聞きになられている。神の御子の声をお聞きになろうとして、人の子と呼ばれる方の声を聞こうとして、ここにいらっしゃる。いいえ、すでに聞いていらっしゃる。ここに、死すべき者が皆、招かれ、集まるようにとされている。それは、ここで、主イエスがわたしたちすべての者を、神と和解させ、そればかりか、すべての者同士で和解させ、共に生きるようにしてくださるためなのです。